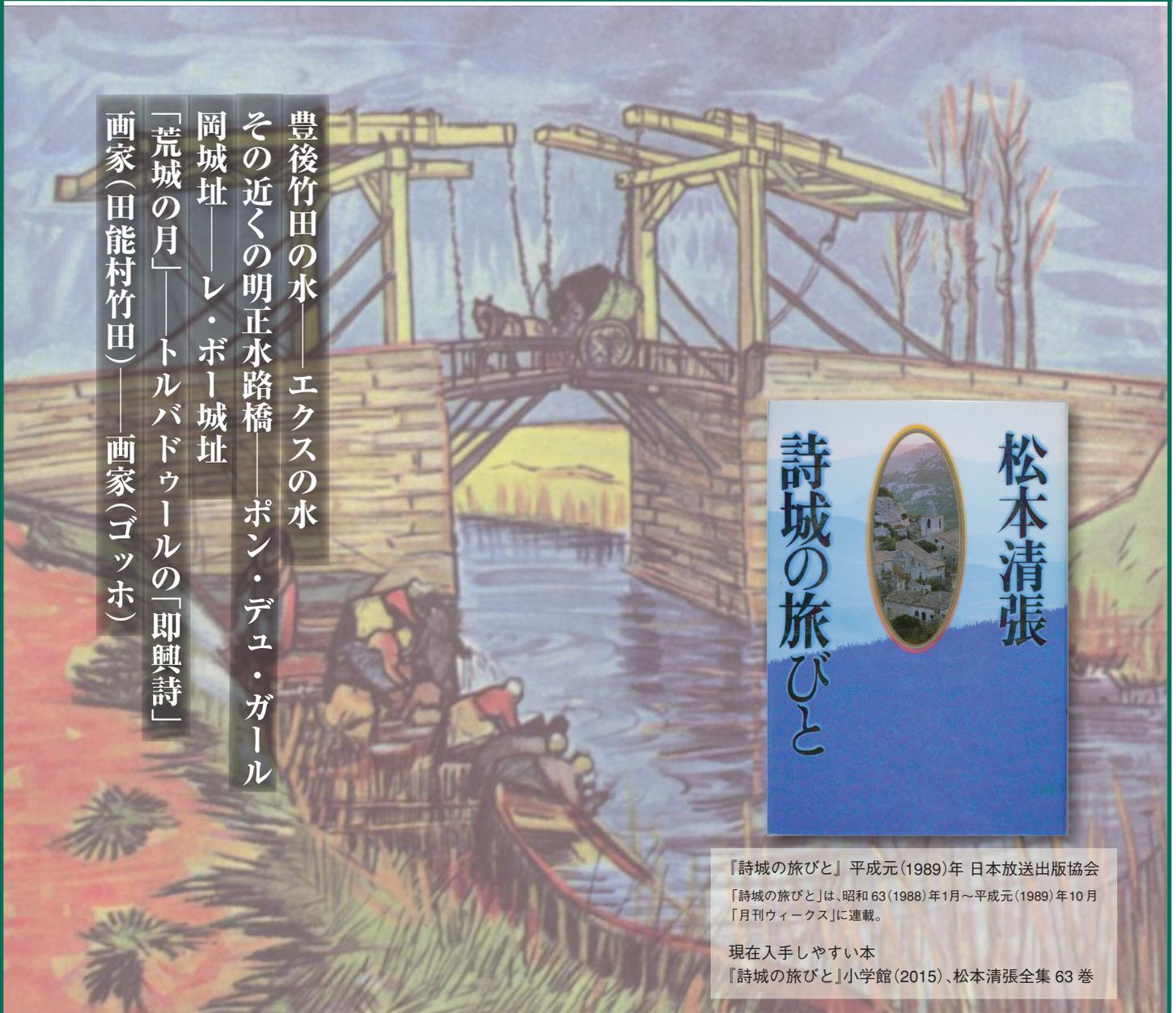


松本清張記念館

◆館報◆

2022.3
第68号



豊後竹田の水——エクスの水
その近くの明正水路橋——ポン・デュ・ガール
岡城址——レ・ボー城址
「荒城の月」——トルバドールの「即興詩」
画家(田能村竹田)——画家(ゴッホ)



『詩城の旅びと』平成元(1989)年 日本放送出版協会

『詩城の旅びと』は、昭和63(1988)年1月～平成元(1989)年10月「月刊ウィークス」に連載。

現在入手しやすい本

『詩城の旅びと』小学館(2015)、松本清張全集 63 巻

目次

記念館開館23周年記念講演会……………	2
松本清張研究会 第42回研究発表会……………	4
「松本清張研究」第23号発刊……………	7
点描 作品の舞台を訪ねて……………	7
トビックス……………	8

作品紹介

新聞社に「南仏プロヴァンス国際 駅伝競走」の企画を投書した多島通子は、その駅伝競走を利用して、失意のうちに窮死した画家の兄の復讐をもくろんでいた。大会の宿舎として選ばれた荘園ホテル「星の館」の主、ピエール・トリオレ伯爵は天体観測と星占いに凝る偏執狂だが、通子のねらう仇がその妻になっている。

プロヴァンス地方には、古代ローマ時代の遺跡である円形劇場や円形闘技場、神殿跡、水道橋のポン・デュ・ガールなどが点在し、画家のヴァン・ゴッホやセザンヌ、小説家のエミール・ゾラといった芸術家ゆかりの地でもある。

アルルの南、ローヌ川の河口にあたるカマルグの湿地帯では、フラミンゴが飛び、白い馬が走り、野牛が群れ、南アルプスを北に望む丘はオリヴと糸杉に蔽われ、平坦部にはブドウ畑がはてしなくひろがり、その隣には野生のラベンダーが芳香を放つ——陽光がさんとふりそそぐ南仏プロヴァンスの風光を背景に、密会、尾行、逃避、追跡といったサスペンスに富む展開に、廃城跡での対決は息をのみ結末となっている。

NHKでのドラマ化を前提に、清張と局スタッフによる海外取材が行われ、連載直後の平成元年十月～十一月に放映された。脚本は寺内小春、演出は吉村芳之が務め、主な出演者は緒形拳、根津甚八、富司純子である。

(学会員 柳原暁子)

松本清張記念館開館23周年記念講演会

「非東京文学圏の持つ意味」

作家

坂上 泉

令和3年11月14日(日) 午後3時
男女共同参画センター・ムーブ
参加者 120名

小説家になった経緯(小説家を目指すきっかけ)



はじめまして坂上泉と申します。こんなきつちりとした場所で、講演させていただくのは初めてです。

私は一九九〇年生まれで、今年、三一歳になりました。高校を出て、大学行つて、そこで会社員になりました。一読者としては、小学生の頃

はシャーロック・ホームズ、中学生頃になると、赤川次郎さんや西村京太郎さん、東野圭吾さんなどの作品に触れてきました。

小説家になろうと思つたことは実は中学生の頃にもありましたし、高校生頃にはちよくちよく書いていました。大学生の時は二次創作をしていたこともありましたが、創作の世界自体には馴染みがありました。けれども社会人になってくると、どうしても忙しくなつて、そういう機会が減つてきました。

大阪に勤務していたとき、たまたま、少し忙しくない部署に異動になりました。その時に、ある書店で「小説家講座」があつて、それを受講してみようと思つたのが小説家を目指す直接のきっかけでした。

(小説家講座で何を書くか「へぼ侍」の誕生)

私は東京大学で日本史を学びました。研究室に二人の近代史の先生がおられて、一人は加藤陽子先生、もう一人は鈴木淳先生でした。鈴木先生の講義で西南戦争について触れた時に、いわゆる官軍と言われる鎮台兵以外に、抜刀隊も戦地に行つていて、資料を見ていくと大阪から来た剣客集団だつたという表記があつたんですね。「何か不思議な集団が行つていますね。」と授業のトリビアの一つとしてお話ししていました。それを思い出して、大阪から西南戦争に行つた元士族がいたなんて珍しい話だし、これでちよつと一本、話を書けないかなと思ひました。

明治一〇年の西南戦争の時の元士族と言つたら、若くても三、四〇代ぐらいのおっさんたちだらうなと思ひ

した。最初はおっさんたちが、『てなもんや三度笠』のよな珍道中で、西南戦争に行つたけど、結局、戦争しなかつたみたいな話にしようかなと思つたんですけど、あまりそういうおっさんたちの話だけで終わつても面白くないな。当時、まだ、私も二〇代だったので若者の視線で、若造一人をおっさんたちの中に入れてみたらどうなるだろうと考えました。

それで書いたのが『へぼ侍』の原型になつたものです。「小説家講座」で講師をされていた編集者の方にも「面白いですね。」と褒められて、喜んで書き進めて、出来上がりしました。編集者の方が、「長編ですし、歴史物で、いわゆる純文学とエンターテイメントだったらエンターテイメントの方だから、松本清張賞に送つてみましょう。」と言われて、「松本清張賞か、あー松本清張か。読んだことないけど、名前は知っている。」と思ひました。そして、松本清張賞というありがたい賞をもらいました。本腰を据えてちゃんと書けるよい機会をいただいたので、まずはこの一作、そして次を書こうと思ひました。

松本清張との出会い

私は松本清張の小説をちゃんと読んだことはなかつたのですが、松本清張賞を受賞して、二〇一九年の夏に松本清張記念館に来させていただく時、東京から小倉までの列車の移動中に『点と線』を読みました。

大学生の時は、加藤陽子先生の授業で松本清張の『昭和史発掘』をテキストとして使っていました。

私が昭和史にそもそも興味を持ったきっかけは下山事件でして、これは『日本の黒い霧』で松本清張が書いています。下山事件に興味を持ったのは、近年の森達也さんや柴田哲孝さんの著作ではあるんですけど、よくよく考えてみれば、小説は読んでいなかったもののこういう形で松本清張との関わりつていうのは実はあつたなと思ひつています。いろんな縁があつて、今日ここに来させていただいていると思ひつています。

北九州に来て思うこと

北九州つてどういうまちなのかつていうと、皆さんご存知の通り、小倉・八幡・門司・若松・戸畑という、もともと全然違う自治体が合併して北九州市になりました。

た。それぞれのまちでカラーが違うんだと思ひました。小倉は城下町から軍都、さらに言えば商業のまちになっています。八幡は何といつても八幡製鉄所のまち。若松は石炭の積出港で、門司は九州並びに大陸へ向けた玄関口という、それぞれすこく特色があるまちです。近代日本の発展をすべてこのまちに凝縮していると言つても過言ではないと思ひます。

近代日本が近代化を進めるにあつては、まずは鉄をやらんといかん。それでできたのが八幡製鉄所です。八幡製鉄所を動かすためにはコークスが必要。そのコークスは石炭から製造します。そういう石炭をどこからとるんだつて言つたら、日本最大の産炭地である筑豊炭田です。良質な石炭をとつてそれを汽車で運び出す。当時の筑豊の鉄道は、そのためだけに作られたようなものです。そして、鉄道だけじゃなくて、川舩で石炭を若松港まで運んで、そこで八幡製鉄所にも使う、それ以外のところにも使う、大陸にも輸出する。かつて若松駅は日本最大の貨物取扱量があつた巨大な駅だつたと知りました。

小倉は小倉で、陸軍が連隊を置いていたつので、そういうところに向けてのいろんなビジネスが生まれてきます。付随していつてTOTOなど、ここ発祥の産業も生まれてきます。力をつけていつた国が大陸に進出していくときはどこから船が出るんだといつたら門司ですよ。昨日、今日と北九州を回つてみましたけれど、すごく得難い経験でした。

そういうまちで松本清張は生まれ育つたわけですが、松本清張のお父さんとお母さんは小倉の出身ではありません。この小倉がそういう近代化の中で商機があるから移つてきた人達です。でもそんなにはる儲けはできない。ブルジョアジーではない市民達がいる。こういうまちで育つたのが松本清張だと考えると、やっぱり松本清張は小倉というか北九州でないと生まれなかつたんじゃないかなと思ひつておられます。近現代日本史を学んだ人間として、今回、北九州を見て回つて、近代日本はこういう形で市民社会が生まれてきたんだと。そういう中で松本清張なんだと感じました。『点と線』で、小説世界の中心組織に揉まれた世知辛さを持ち込んで、それを生々しく描いた社会派と言われる作品を生み出し、評価されましたけれども、やはりそれは戦前から培つてきた近代、小倉というか北九州で生まれた一つの副産物なのかと思ひつています。

非東京文学圏の持つ意味

松本清張という人間が小倉から生まれたように、いろんな文学者が日本各地から生まれています。当然、東京

からも、大阪からも、北海道……からも。そういう方々って、それぞれの土地の持つ膨大な土壌があって、その凝縮された一滴みたいなものだと思います。松本清張はまさに、何度も申し上げたように、近代日本の石炭と製鉄、あと軍都を中心としたビジネスの発展、そういう九州の一滴だと考えるんですけども、他の土地でもそういう人々が生まれてきたはずなんです。

けれど、今、人口の面でも、経済の面でも、文化の面でも東京一極集中が進んでいます。私の出身は兵庫県の姫路市で、日鉄広畑製鉄所というのがあります。こちらと同じ製鉄のまちです。夕方ぐらいいなくなって海の方を見ると真っ赤な炎が煙突から見えるわけです。皆さんもよくご存知の光景だと思います。ですが、最近は縮小傾向にあり、こういう形でやっぱり地方で経済が細くなってきます。若い人間が出て行ってしまおうと、エンターテインメントも東京にどんどん移ってしまおうと思います。現実問題として、日本全国そうだと思います。

そうなる、やっぱり東京からしか物語が書かれなくなっちゃうのかな。でも、それは日本全国の地域社会が培ってきた物語というか、基層が発露できなくなると、だんだん細っていくちゃって、ものすごくもったいないことだなと思っています。

私は、今は東京に勤務していますが、一時期、大阪に四年間赴任していましたので、大阪にも愛着がありますし、何より兵庫の出身なので地方のエッセンス、そういうものをちゃんと何かしらの形で残したいなと思っています。東京出身ではない私が物語を書くんだったらそつちを念頭に置いて書きたいなと。

西南戦争の歴史の話ってどうして東京中心で、東京と鹿児島を舞台に書かれがちです。けれども、『へぼ侍』を書いたとき調べていると、実は結構いろんな人達が関わっていて、仙台的の鎮台から兵隊が行っていたとか、大阪の剣客集団なんて元幕臣とか賊軍なんですけど、今度は官軍になって戦っています。さらに調べていくと彼らの戦っている場所は宮崎の方が長かったんです。西南戦争だけとってみても、やっぱりいろんな地域の話が織り込まれています。

皆さんよくご存知の『ALWAYS 三日月の夕日』という映画がありますよね。あの光景は昭和三〇年代、夕日が綺麗なところに東京タワーがどんと伸びて、貧しかったけどちょっと夢がある時代です。でも東京タワーが見えるのなんて日本国民の中のごく一部でほとんどの人は東京タワーなんか見て育ってないんです。

じゃあ大阪はどうだったのかと言いますと、アパッチと言われるような、大阪の中心地にある旧大阪砲兵工

廠、大阪陸軍造兵廠の巨大な空き地が、昭和三、四〇、へたしたら五〇年ぐらいいまで残っていました。そういうところに空襲で焼け出されたままの銅がゴロゴロ転がっていて、朝鮮戦争の金偏景気の頃に採掘集団が潜り込んでいました。東京タワーが見えない戦後の大阪では全く別のギラギラした世界があったわけなんです。

戦後日本を書く中で、東京タワーや東京オリンピックなど、東京は物語になります。でもそれだけじゃないでしょう。なので、私は二作目『インビジブル』では、昭和三十一年の「もはや戦後ではない」と言われる直前の昭和二十九年の大阪を書きました。ドロドロしていて、大阪のすぐ横がまだ荒地だった、そういうあまり認識されていないようなところを書いてみたいというのが『インビジブル』に込めた思いでもあります。

私はいろんなところを旅するのが好きです。いろんなところを歩いて、聞いたりすると、やっぱりそれぞれの土地にいろんな物語がある。けれど、東京だけの視点で言われるのはもったいないと思います。

今日の講演テーマでは、いわゆる東京の文学圏でないものという意味で『非東京文学圏』と書きましたけど、どいう意味があるのかと言ったら、そもそも東京だっといういろんな地方からやってきた人たちのまちなわけです。その人達の背景にあるのがその地方なんです。東京の一滴の中に四七都道府県、正確には四六道府県の東京以外の地方がぎゅっと詰まっています。であればそれをもっと解きほぐしていったら、それだけでも一つ一つ面白い物語だと思うし、僕はそのうちのひとつ、大阪というところを描いたつもりです。

今後の作品づくりについて

今度は沖繩を書いてみようと思っています。来年、本土復帰五〇年を迎える沖繩ですが、戦後史を考える中ですごくイレギュラーな存在です。ご承知の通り、地獄のような沖繩があったその後、米軍に二七年間統治された後によりやく本土復帰を迎えます。今でもやはり独自のアメリカ統治下の影響がありますし、もともと別の国だった琉球王国だったところを、日本に入れても別の国の独自の文化がそこにはあります。写し鏡として、東京中心の戦後を見つめる中で興味深い題材だなと思っています。現在、沖繩県警察本部がありますけど、その前身で琉球警察という組織がありました。警察組織ですら文化が違ってしまうんです。今調べて、書いてるところです。

沖繩を書く時、私は沖繩のことを一般的な感じでしか知りません。自分のルーツがあるわけでもありません。しかし、沖繩のことを沖繩の人しか書いちゃいけないの

かという、それは違うと思っています。文学はある意味、全方向的に無差別なわけです。

もちろんその土地の人がその土地の思いを込めて書く、私は『インビジブル』や『へぼ侍』は、関西出身の人間の思いを書き込めたつもりです。沖繩の人が沖繩の思いを込める、それは当然だと思っただけですけど、そうじゃない人達からどう見られるのかという込め方もあり得ると思っています。ただ、よそ者が書く時ってすごく難しいです。沖繩の人が沖繩戦でどう思うかという思いをしたのかというその土地の思いを大事にしたいと僕は思います。一方で沖繩が二七年間、アメリカ軍に統治されていた時代、じゃあ悲惨なことばかりだったのか、生まれて、育て、結婚して、働いて生活して死んでいくという普通の営みもあった。もちろん戦争というものがあつたにせよ、そういう普通の生活の悲喜こもごもというのはあつたはずなので、その楽しいことも、悲しいことも含めてちゃんと理解した上で、物語を書きたいなと思っています。

それから、松本清張が一九六〇〜七〇年代に『日本の黒い霧』『昭和史発掘』を書いた当時、関係者もまだ生きておられ、記憶が生々しい頃です。小説家とはいえず、歴史的な観点で調べて、世に出して一石を投じた。現実にそのことを見てきた方もまだ多い中で、すごく勇気があることだと思っています。

歴史研究の中で、二、三〇年ぐらいい前の話を、いわゆる歴史にするという意味での歴史化ってなかなかできていなんじゃないかなと、僕は大学の頃から思っていました。手法さえ大丈夫であれば、一九五〇年代、六〇年代というのは、もう歴史学の領域に入っていると思うんです。私は『インビジブル』は歴史小説のつもりでも書いています。

今、いろんな作家さんを見ていると、歴史にしよう、歴史小説としてやってやろうじゃないかという意気込みはかなり上がってきていると感じています。そういう中で、私はどういふ切り口ができるのかなという、やはり地方から何かを発信していきたいと思っています。



オンライン

松本清張研究会 第42回研究発表会

研究発表者…十重田裕一 早稲田大学文学学術院教授
早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー) 館長
令和3年12月4日(土)開催 午後2時〜3時30分



コロナ対策のため、第42回研究発表会はオンラインで開催いたしました。早稲田大学の十重田裕一先生に、アメリカで開催された国際シンポジウムについて報告していただきました。

第1部 研究発表

「松本清張」

メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学

国際シンポジウムの特色

第21回松本清張研究奨励事業で、日本大学教授の志村三代子氏と明治学院大学教授の斎藤綾子氏とともに、「松本清張文学のメディアミックスに関する基礎的研究」という研究を行う機会をいただきました。その中で、今日報告するような国際シンポジウム『松本清張…メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学』をカリフォルニア大学のロサンゼルス校(UCCLA)で、2020年2月14日、15日に開催いたしました。

この国際シンポジウムの特色は三点あったと思います。第一点目は、北米における松本清張の本格的なシンポジウムとしては最初という点です。

第二点目は、発表内容が充実していて清張研究を大きく進展させたということです。これが大きな収穫だと思います。

第三点目は、オーディエンス(聴衆)の方々も大変反応が良くて、例えば大学や大学院などの授業でも松本清張を取り上げてみたいとおっしゃる教授が複数いらっしゃいました。今回のシンポジウムが清張文学を英語圏に伝える一つの契機になるのではないかと思います。

「松本清張」
メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学

「松本清張」…メディア・アダプテーション・ミドルブラウ

ウ文学」というタイトルは、清張の文学をとらえる上で、三つのキーワードを考えて、このようにいたしました。

清張はやはり、高度経済成長期にメディアが大きく展開していく中で活躍した。そういう点でとらえることが、文学研究だけではなく、メディア研究、あるいは、日本国内だけではなく海外での研究においても、非常に重要な意味を持つのではないかと、この「メディア」を入れました。

そして、清張の文学は多くが映画化やテレビ化されている。つまり、他のメディアに転換しながら表示されていく力がある。そういう意味で、「アダプテーション」(「改作・脚色」という概念を入れました。

最後に、松本清張にはやはり中間的な、あるいは民主的なイメージがありますので、それを「ハイブラウ」ではなく「ミドルブラウ」という形で表現しました。

国際シンポジウム1

シンポジウムは、研究発表は九つあって、映画上映もあって、翻訳者の方による朗読もあるという非常に大きなものでした。

研究発表の様子を見ていただきます。左の写真は、発表者の方と、オーディエンスの方がたくさんいることがよく分かると思います。右の写真は、早稲田大学高等研



究所講師の金ヨロン氏が「東京裁判」、「法と文学」という視点から清張文学をとらえ、非常に魅力的な発表をされているところですが。

国際シンポジウム2

次のスライドですが、左の写真は、フランスの代表的な日本文学研究者である坂井セシル氏と、このプロジェクトの企画者である日本大学教授の田中ゆかり氏との間でのやりとりが映っており、右の写真は、清張文学の映画化の代表的なものの一つ『張込み』のスクリーニングを行ったときのポスターです。多数の方がお運びくださいまして大変好評でした。



「松本清張の光と影」

私は企画者ということもあって、最初に清張の全体像を示す発表をいたしました。テーマは「高度経済成長期、アダプテーションの状況(映画化・ドラマ化)」です。以下、その内容をお話しさせていただきます。

序

川端康成と松本清張を対比的にお示しすることによって清張の魅力を伝えることができると考えた次第です。

川端康成には、「美しい日本の私」というノーベル文学賞受賞の偉大な講演がございますが、松本清張は「美しい日本の私」だけではなく、「美しくない日本の私」も描いた。つまり、川端は雪月花のような日本の美を非常に象徴的に描くような小説を多数書いていきますけども、清張はむしろ日本の中にある暗部というか、日本の美しくない部分にもちゃんとメスをを入れて書いていった。そういう点では、非常に対比的であったように思います。

また、清張は川端康成を意識していたのではないかと思います。立教大学名誉教授の藤井淑禎氏が「伊豆の踊

子」と「天城越え」の関係について、非常に優れた論文を書いてらっしゃいます。清張はやはり、川端康成の裏バージョンのようなどころを意識して創作をしていたのかもかもしれません。

松本清張のデビューと占領からの解放

松本清張は米国の日本占領が終了しようとする時期に40歳過ぎでデビューしたということ、アメリカとの関係を示すために最初にお話ししました。「西郷札」は1951年3月、そして「或る『小倉日記』伝」が1952年9月に発表されました。「或る『小倉日記』伝」は最初、直木賞候補になりますが、その後、第28回芥川賞の方に回されて、非常に稀有な形で芥川賞を受賞いたしました。「ミドルブラウ」ということも関連しますが、清張の場合は直木賞的な側面と芥川賞的な側面の両方を持っている。それが非常に魅力的で、おそらくこれからも世界にマッチしていく要素ではないかと、このシンポジウムでは話しました。そして高度経済成長期に華々しく活躍していく。なお、芥川賞を受賞するときには、川端康成が清張を選考した。これも大変興味深いことだと思います。清張と川端の関わりというのは日本の近代文学を考える上で非常に対照的であり、かつ重なる部分もあります。

1950～1960年代の松本清張の出版ブーム

では、次の50年代から60年代の部分についてです。50年代後半に「点と線」と「眼の壁」がベストセラーになって、そして「昭和史発掘」の単行本が300万部をこえ、1969年にはカッパ・ノベルス版の著作の発行部数が1000万部を突破しました。清張の文学が本場にミリオンセラーであり、いかに当時の多くの読者に訴えかけていったかということ、米国の、そして、ヨーロッパ、東アジアの研究者の方々に伝えました。その文学



の内容は「秘匿された事実と隠蔽された日本の歴史を暴く」というのが特徴的で、今読んでも非常に魅力的であるということをお示ししました。

中央公論社『日本の文学』事件

次に、中央公論社の『日本の文学』事件についてもご紹介いたしました。『日本の文学』は全80巻で、大変大きな企画でした。ここで、松本清張の作品を収録することが検討されましたが、三島由紀夫が反対して未収録になったという事件であります。これは非常に象徴的な事件で、おそらく現在、北米で清張のものが翻訳されず読まれてこなかったという現状にも繋がってくるのではないかと思います。その編集委員に名を連ねていたのが、谷崎潤一郎や川端、それから三島由紀夫、それから、ドナルド・キーン氏ですね。谷崎、川端、三島の三人は北米でBIG3という言い方でよく言われる、北米あるいは英語圏で最も翻訳されている、最も有名な日本文学作家でした。もちろん現在は状況が変わってきていますが、当時はある種の聖典だったわけです。オーディエンスとそのことを確認するために、示した次第でございます。しかし、今回のシンポジウムで、清張は非常に面白く思われた方々がたくさんいましたので、少し状況が変わっていくのではないかと思います。

1950年代 松本清張原作の映画化

50年代になってから、『羅生門』、『源氏物語』、『西鶴一代女』、『雨月物語』、『地獄門』などの映画が次々に制作され、そしてそれがベネチアやカンヌなどの国際映画祭で高い評価を受けました。

それでは、日本映画が相次いで国際賞を受賞するような中であって、清張の映画はどうだったか。50年代だけでもたくさんさんの映画化がなされています。まだデビューして間もない時期の清張の作品が、これだけ制作されていたということはやはり驚くべきことだと思います。松竹、東映、日活など、複数の映画会社で競って制作され、とりわけ松竹が多いことが分かります。1958年は1年で5作品が映画化されており、多様な映画監督が清張のも

のを手がけています。このような状況は、今見ても興味深いことではないかと思えます。

1960年代①

続きまして60年代になるともっと増えていきます。中村登や野村芳太郎をはじめ非常にすぐれた映画監督たちが清張ものを取り上げていく。『黒い画集』や『黒い樹海』などはやはり、日本の暗部を描いていく、高度経済成長期の光の部分だけではなくて影の部分も描いていく、清張の特色を示していた。無宿人とかそういう日陰の存在にスポットを当てて描いていく、清張の特色も出てきていく。

1960年代②

それから60年代の続きで、『けものみち』や『霧の旗』など、清張の代表作が映画化され、60年代では14作品が映画化されています。タイトルに黒や影、あるいは自然の風や樹々などが入っているものも多いような感じがいたします。それから『黒い画集』のシリーズ化が行われて、清張の映画化の、あるイメージが形づくられていきました。隠蔽された事実の暗部を暴いていくという特色があって、サラリーマン層たちの人気を博しました。

1970年代～1980年代

次の70年代も非常にすぐれた作品がありますが、松竹での制作数が以前にも増して多くなっています。それでは、80年代はどうか。映画はだんだん斜陽になっていく時代です。映画産業が衰退していくにもかかわらず、80年代の半ばまでは、清張のものは比較的順調に一定数映画化されました。これも清張の特色の一つではないかと思えます。松竹の野村芳太郎監督との組み合わせが多く、8作品もある。他の作家に比べるとかなり多かったように思います。

松本清張の代表作とシリーズム

それから、清張作品の映画化と相まって非常に重要な視座の一つに、松本清張の代表作とシリーズムとの関係があ

るとも説明しました。『張込み』のスクリーンングがちょうどあって、ご覧いただいた方には理解しやすかったと思います。『張込み』という映画の制作には、佐賀市が非常に協力した。やはり県や市などの各地域が映画産業と結びつきながらそれに協力をする。ですから映画化とそのツーリズムというのは不可分に結びついていることを、ご説明いたしました。松本清張の代表作が舞台となった土地は観光資源としてそれを利用し、また、観光地を通じて作家とその著作が広告されていく。そういう循環があったらと思うと思います。そのところがやはり、清張の文学が非常に国内各地域で受容されたことと、より密接に結びつくのではないかと思います。さらに、高度経済成長期を背景に進行した交通網の整備と、出版・映画・テレビなどのメディアの拡大が相まって、サラリーマン層を中心に人気を獲得していったのです。

松本清張原作のテレビドラマ化

それでは、テレビドラマはどうか。当時、データベースで調べたときで534件、確認できました。50年代は30作、60年代が146作、60年代に非常に多くなります。そして70年代57作、80年代120作、90年代63作。そして2000年代が59作、2010年代が58作となります。60年代と80年代が非常に多い。注目すべきは、減っても、50作は維持しているところですね。00年代の59作、10年代の58作というふうに減らないところがすごいですね。そして現在でも、清張原作のドラマが作り続けられている。現在に至るまでに、非常に安定的に推移しているというのが、清張のテレビドラマのアダプテーションの特色ではないかと思えます。対比的に川端康成と比べてみると、現在までも少しずつは作られていますけども、1桁それも3作。松本清張の場合と比べると、歴然とした差が出てきております。

松本清張原作の映画・テレビドラマ化の比較

清張の文学は書物だけではなくて、映画やテレビドラマ

マを通じて多くの人たちに共有されていくことが分かります。だから清張は忘れられずに読まれていく。映画化がなくてもテレビドラマ化が維持されることによって、清張の名前は若い人たちにも伝わっていつていることが想像されます。これも特徴の一つです。

全集・文学賞・文学館の機能

私がシンポジウムでもう一つ強調したかったのが、『全集』と『文学賞』と『文学館』の機能についてです。これは非常に重要な視点ではないかと思えます。しかし、まだきちんとした研究がなされていないので、問題提起的にお示した次第です。松本清張とそれから先ほどお話ししたBIG3ですね、谷崎、川端、三島の例をあげました。

『全集』、『文学賞』、『文学館』ということでは、それぞれの作家に比べると、とても恵まれた環境にある作家たちではあります。四人を比べていただくと、松本清張の場合が抜きん出て良い状況にあることがうかがえます。例えば、『松本清張全集』は文藝春秋から出ています。藤井康榮名誉館長が大いに力を尽くされて、すばらしい全集を作られた。そして『松本清張賞』が日本文学振興会、『全集』がきちんとした出版社から出て、そして、『文学賞』があるということはかなり大事なことでないかと思えます。

さらに、松本清張記念館のことを話しました。北九州市がすばらしいスペースを作ってバックアップし、そして現在までもう20年以上にわたって維持されている。このことが、清張の文学が衰退することなく、むしろ亡くなったからでも現在まで多くの人たちに共有されている、非常に重要な基盤を作っているというお話をしました。

今、文学の置かれている状況は非常に厳しくなっています。だからこそ、出版社や北九州市直営の松本清張記念館のような文学館の役割が、文学の振興には非常に大きな力を持つようになってくるだろうと思えます。今後ますます状況は厳しくなっていくでしょうから、このことは改めて強調しておく必要があります。

第2部 早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)

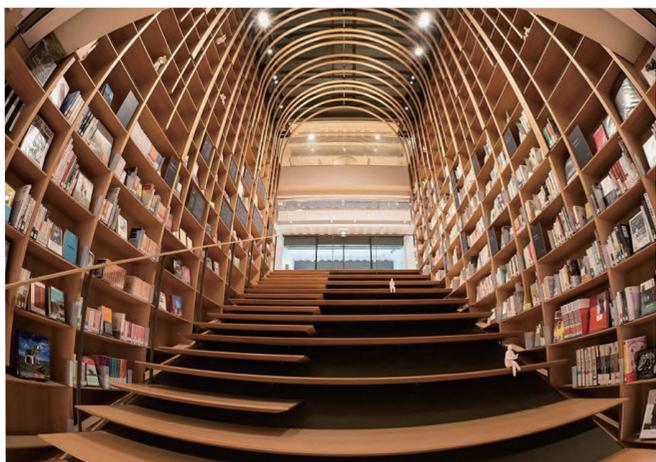
抜粋

早稲田大学国際文学館の展望

どういうことを目指していくのかということですが、大きくは二つあります。

一つは、日本文学・文化の世界的な研究センターにするということです。世界的研究拠点になるために、英語と日本語でのすぐれた研究論文を掲載するような雑誌を、定期的に刊行していく予定でございます。編集長は本学教授で国際文学館の副館長の榊原理智氏で、世界の研究者に編集委員に加わっていただきます。

もう一つは、研究者だけではなくて多くの文学を愛好する方々、文化・文学を愛好される方々に来ていただきたいような、開かれた風通しの良い文化交流の場にしていきたいということです。館内施設は非常に多彩な魅力を持つております。これまでの文学館の魅力を引き継ぎながらも、新しいいろんな試みをしていこうということでも、村上春樹氏に来ていただいたりして様々なイベントを行うようなスペースもあり、非常に人気のあるカフェもできました。小さなコンサートを開けるようなホール・スペースもあるのです。そこで音楽を演奏することも現在はお考えしております。



早稲田大学国際文学館提供

研究誌「松本清張研究」第二十三号発刊

特集 清張と東アジアⅡ

往復書簡 人間の運命と苦悩する魂を描く

莫言・藤井省二

論文

二〇〇〇年以降の中国における松本清張の受容……………尹芷汐

—— Doubanの読者レビューをめぐる計量分析

韓国での松本清張小説の受容……………安慧娟

—— 玄在勲の小説とテレビドラマを中心に

占領下の日本における黒人兵の表象と実態……………岡田泰弘

—— アメリカ黒人史の視点から松本清張『黒地の絵』を読む

現地レポート

韓国近代文学館——韓国文学を楽しみ学ぶ……………咸苔英

国立台湾文学館——過去と現在を繋いで未来へ……………周華斌

シンポジウム

東アジアの中の邪馬台国——清張邪馬台国論の現在

記念講演 邪馬台国の時代……………倉本一宏

—— 卑弥呼の倭国連合と纏向の倭王権

パネルディスカッション

倉本一宏 片岡宏二 北橋健治 久米雅雄(コーディネーター)

エッセイ

極小の詩……………穂村弘

ポストコロナの時代に「砂の器」を読む……………神里達博

記念館研究ノート

評伝抄 松本清張……………柳原暁子

韓国・中国での清張受容(新境地)の芽生え……………中川里志

作品の舞台を訪ねて 「表象詩人」② 盆踊り

深田夫妻は小倉市街の中心に位置した堺町から陶器会社が高級社員のために建てた木町の社宅へ移転した。

「わたし」は秋島から、八月一六日に木町で開催される盆踊りに誘われた。盆踊りには明子も久間も参加するという。「わたし」は明子と久間のことがどうしても気になり、木町に行かなければと考えた。

夕方から木町に出かけてみると、盆踊りの場所は町の中の広場で、見物人を入れてすでに百五十人くらいの人が集まり、踊りがはじまっていた。

中央には檜は組んでなかったが、その代り高張提灯を三つ立て、そこから八方に綱を延ばして赤い小提灯を吊りならべ、その下に、浴衣がけの男女が手拭いで頬被りしたりして輪をつくって揺れ動いていた。唄い手と三味線、太鼓は高張提灯の下にかたまっていた。(略) この盆唄は「口説き」で、「鈴木主水」という侍は……という心中ものを単調な節まわしで唄う。そうして間々に踊り手たちの悠長な懸声(かけこゑ)がはいる。「ええとさっさ」と言って手持ちの団扇をいっせいに叩くのである。

(後年、わたしは森鷗外の「小倉日記」に「聞く今宵長浜(筆者註・小倉の漁村)に盆踊りありて夜を徹すと。小倉男女の高く笑ひ高く歌ひて門を過ぐるもの唄に至るまで絶えず。……その歌ふところは所謂口説(いはゆるくどき)にして、舞ふもの皆節(はなぶし)を撃ちて、えとさっさと呼ぶ。此に至りて始(はじめ)て盆踊の状を見ることを得たり」とある一節に行き当り、思わず微笑を洩らしたものだ。)

(文藝春秋「松本清張全集39」表象詩人)

「わたし」は夜通し続く盆踊りの中に、明子も久間も秋島も見つけることができなかつた。その夜、明子は何者かによって殺害され、事件は迷宮入りする。犯人はだれなのか。四十年後に再会した秋島から事件の真相を語られる。

盆踊りの様子は、踊りに興じる人々の熱気を感じさせる一方で、悲劇を予感させる印象的な場面である。『小倉市誌補遺』によると、盆踊りは小倉市内では長浜を始め旧企救郡内各村に行われて来た地方年中行事の主要なるもので、殊に青年男女に取つては最も楽しいものであつた(そうである)。

小倉南区には、旧企救郡の農村部に分布する盆踊りのひとつである「能行の盆踊」が伝承されている。(太鼓一個を踊り輪の中心に据え、音頭取りの口説歌に合わせ右回りに踊る。踊りの所作は、左手を前方に伸ばし、右手は曲げて右肩の上にもっていく。あたかも弓を引くような格好で豪快にみえる。

この踊りが近郊で有名なのは、踊り歌の「能行口説」によるものである。天保六年に能行村で実際に起こった心中事件を素材にして作詞された口説歌で、以後、企救郡の代表的な口説歌となった。昔は盆の期間中踊っていたが、昭和十年に、心中した二人の慰霊祭を行つて以来、八月十六日の夜だけ踊っている。昭和五九年には市指定無形民俗文化財に指定され(※)、現在も地域の人々たちによって受け継がれている。

(※) 参考資料・北九州市史・民俗



能行の盆踊



令和4年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親しんでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。
新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

■ **応募対象** 全国の中学生・高校生

■ **課題図書** 中学生・高校生ともに下記から1作品

「砂の器」(『砂の器』上・下 新潮文庫)

「顔」(『張込み』新潮文庫)

「西郷札」(『西郷札』新潮文庫)

■ **応募方法**

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので必要な人はコピーをおとりください。

■ **応募締切** 令和4年9月30日(金) ※当日消印有効

■ **選考** 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ **発表**

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表する予定です。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ **賞** (受賞人数等変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)
- 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)
- 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞とらせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

応募先
問い合わせ

〒803-0813 北九州市小倉北区内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303

※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

『清張さんの道歩く会』 による紙芝居



■ **日時** 6月11日(土)14時から15時30分

■ **場所** アクロス福岡 1階円形ホール
(福岡市中央区天神1丁目1-1)

■ **定員** 50名(事前予約制)

予約開始は5月1日(日)から

アクロス福岡のホームページ

またはお電話(092-725-9100)で。



■ **内容**

紙芝居「清張さんの歩いた道(上・下巻)」、「清張さんと家族の想い出」を上演。
また、同日10時～18時には、松本清張を紹介するパネルのほか松本清張全集や松本清張記念館企画展図録の展示、記念館オリジナルグッズ販売等も行います。

● **編集後記**

今年の8月は清張没後三十年となります。企画展では国立台湾文学館と連携して「台湾ミステリーと松本清張」の開催を予定しています。開館記念講演会では、生物学者の福岡伸一先生をお招きします。そのほかにも研究誌発行や研究奨励事業など、清張の業績を継承し、伝えていくための事業を展開していきます。(M.M)



講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
1月25日	富野市民センター
2月3日	東郷市民センター



イラスト:山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
https://www.seicho-mm.jp
制作 有限会社シーズ

- **開館時間** 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- **休館日** 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)館内整理日
- **観覧料** 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- **アクセス** JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車) 車: 北九州市都市高速 大手町ランプより5分

